

# 騒がしくてやがて空しい「国葬」かな(2)

三上治 10月6日

霞が関の街路樹も色づきをみせはじめ、銀杏の木は銀杏(ギンナン)を落としはじめています。いつもの見慣れた光景だが、なんとなく懐かし気持ちもする。そういえば、国会周辺の銀杏を拾い集めてパーティをやったこともある。炒られた銀杏の香ばしい匂いとビールがよくあった。それを主催した江田さんは川内原発の現地に闘いを移しているのだけれど…



国会が開かれ、首相の所信表明演説があった。僕はその全文を翌日の新聞で読んだのだが、迫力というか、気迫の感じられない官製作文のような文章に驚いた。その中に「先週執り行った安倍元総理の国葬義は、厳肅かつ心のこもったものとなりました。海外からお越しになった多数の参列者の方々から寄せられた弔意に対して礼

節をもって、丁寧にお応えできたと考えております。その際、国民の皆様からいただいた様々なご意見を重く受け止め、今後の生かしてまいります」。(所信表明演説)とあった。

岸田は国民の国葬批判を「いただいた様々なご意見」として受け止め(?)るとして、かわして行くという算段らしいが、もう少し真摯にというか、真正面に反応をしていいのではないか。批判の中で首相は首相なりに政治的な覚悟を持って国葬をやったのだろう。自分なりの見解をいうべきだ。結局、彼は安倍政治に対する国民の批判が国葬批判に出てきたことを受け止められなかったのである。安倍政治が民主主義の仮面(言説)を看板にしなが、非民主主義政治をやってきたことへの批判が国葬批判であったことを受け止められなかったのだ。

僕らは安倍政権の中で脱原発運動をやってきた。彼は議会でまともに原発問題(再稼働も含め)の討議を経ず(議員から提起された原発ゼロ法案は凍結)に経産省に再稼働などをやらせてきた。行政独裁とでもいうべき政治的態度で処理してきた。安倍は、議会は法案などの決議の必要事を得ればよいという考えで、強行採決を常套手段とし、肝心の議論、あるいはそれで合意を得るという手続きを無視してきた。いうなら立憲的な政治を否定してきた。立法機能の本来の意味を無視してきたのであり、閣議決定を議会で討議や合意形成よりも重視してきた。この安倍政治は独裁政治であり、強権政治の一つだというのが僕らの、そして多くの国民の批判だった。岸田はそんなことを振り向こうとしなかった、岸田は原発について、突然のごとく、再稼働や新規建設などをい出したのも安倍のやり方の踏襲である。新規建設とってそのための国民(市民や地域住民)の合意をえる可能性があると考えているのか。上から、つまりは官僚的に強制すればできればとも考えているのか。金にものをいわせて。そんなことがまだ可能と思っているのか。



僕は国会開催に伴う国会中継をほとんど見ない。議論が面白くなく、退屈であるということが正直言っているが、そのことはよく考えてきた。国会(議会)での討議による意思決定(合意形成)が民主政治であるが、そういう姿がそこには見られないためだ。そういう政治力が野党も含めて日本の政治家には足りない。それがスリリングで

緊張に満ちた議論を存在させないし、テレビを見る気にさせないのだ。国会(議会)は形式的に議決を必要とすることを満たすための形式的な場であり、それは形骸化してある。道路一つ隔てて国会前に座り込み行動をしながら、国会の内を見ていた時も同じ感想だった。その意味では民主主義は不在であり、空白であるのだ。なぜだろうか。そういう自問を僕はいつもしてきた。

近代の日本の政治の歴史において、憲政(憲法政治)が語られたことはある。立憲政治は何度も主張されたが、議論による統治(意思決定や合意形成)が存在したことはほとんどなかったのである(戦前の政党政治や天皇統治の歴史を振り返ってもそのことはいえる)。結局のところ天皇という権威による統治、それが国家意思であり、合意とは権威への隷属だということが優位だったのである。この型の統治、政治が支配的だったのである。

討議による統治なんて簡単なことのように思われるけれど、どうして、どうしてこれは簡単なことではない。会議がどんな風にあるかを想像すればいい。(例のオリンピック実行委員会での森喜郎の発言を想起せよ)。なぜ。まともな討議が存在しないかは、様々の会議のありかたを見ればいいのだ。会議が意思決定の場として自覚され、そのように運営されることは稀なのだ。討議が不在で会議らしい会議がないのはそれが機能する前提というべきものが乏しいためである。自由な発言や意思表示があたりまえという文化的、社会的な伝統が(基盤)がないのだ。草の根まで天皇制が支配していると言われたが、これは権威に従属ということであり、自由の伝統とは対極的なものだ。自由や民主主義はそれがあって守るというものではない、権力との闘いの中で生み出し、創り出していくものである。日常の場での、つまりは小さな言葉での闘いに場で創り出していくものである。その裾野形成が大事なのだ。

議会が特別な箱(場)のようにあって、そこでだけで十全な討議の展開がなされるということなどない。討議による統治ということが成り立つためには、社会的に自由な政治的発言が当たり前としてなければならないし、自治を持った社会的存在が根付いていないといけない。そういう存在が権力に対する反抗としてあるのが自然でなければならない。言論の自由というが、そういうメディアがなければならない。それはメディアが闘う主体としてあることにほかならない。



例えば、安倍を銃撃した山上は精神鑑定ということで隔離され、彼の行動の真意は伝えられていない。どのように評価されようが、彼がどのような考で行動したのかは明らかにされなければならないし、伝えられなければならない。メディアはそんな当たり前のことができていない。山上は精神疾患患者として彼の発言は葬られる。その意味では山上の世界を想像し映画にした足立正男は勇気の

いるすぐれた行為をなしたのだと思う。いうなら、討議による統治(意思決定)は大きな言葉での政治【自由や民主主義】だが、これには小さな言葉での政治【自由や民主主義】が裾野として存在しなければならない。最近の SNS などの動きは自由や討議なき社会の伝統を変えていくのかどうか、注目している。

かつて僕は議会政治には不信があり、院外の大衆運動に力を注いでいたことがある。それは議会の外部で自由で民主的なものを存在させること以外に民主主義の不在や空白を解決していく道はないと考えていたのだ。日本の政治の変革はまずそれが必要と考えた。直接民主主義を旗印にした全共闘運動はそういうものの一つだった。長い射程で考えればこの考えは今も変わらない。



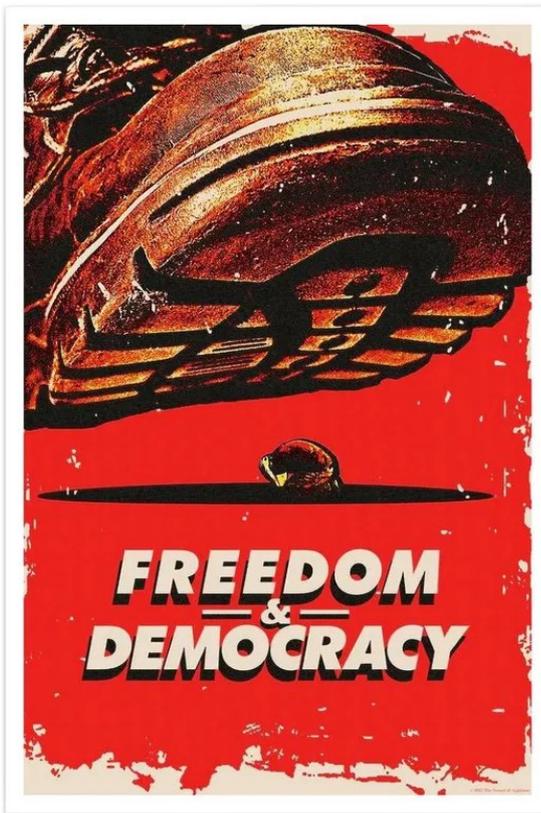
ただ、民主党による政権交代があり、その政権があっけなく、敗退したとき、僕は何も寄与できなかったと思った。民主党政権は院外の大衆運動を自己の政治力として生かせないところに弱点を見ていた。沖縄の辺野古基地移設問題も原発問題も、官僚との闘いで民主党政権が敗退していく

のは大衆運動と連携できなかったからである。このことはよくわかった。民主党政権には大衆運動が自由や民主主義の現在の基盤であり、それを自己の政治力にしていく考えがなかった。交代した政権の内実を強くする基盤だったのに。

同時に議会で議論をもってリードしていく力がないこと気づいた。議論による統治を担える政党としての力が民主党にはないことが分かった。民主党が党内で議論し政策の一致を持ってないこともさることながら、党内での論議が十全で政治力を持つというには遠い存在だということを知った。あらためて自由や民主主義のあり方(存在)に注目し、それに基づく主体の創出を考えざるを得なかった。日本では自由や民主主義とは不在であり、空白であり、未来からの視線であるにすぎないとは繰り返しのべてきたが、それはだから依然として革命の課題である。戦後民主主義だって別段守るべきものでもない、賭けるべきものではない。そんなものは言葉としてはともかく、実質

的にはなにもないからだ。戦後民主主義をまもるよりも民主主義の主体を創り出していくことが肝心なのだ。

自由や民主的なものは、それは何かを問いながら創り出していくべきものである。権力に対する反抗とその運動の中で創り出していくべきものだ。僕は安倍政治の批判の困難性は民主主義の困難性であるといったが、それは安倍政治批判の主体の形成の困難性でもあった。国葬に対するこれだけの批判があったことは、主体を形成する基盤はあり得ることを示した。この主体は伝統的な左翼が信奉してきた能動的な労働者階級の意識に立った存在の形成ではないと思う。すくなくともそういう考えには、〈プロレタリア独裁による統治〉がスターリン主義に帰結した歴史の反省(総括)があると思う。僕は伝統的左翼の理念は自由や民主主義の主体にはなれないと思う。伝統的左翼に対する革命的批判の帰結として僕はこういう考えに到達した。百年の左翼はその歴史をふりかえり、総括することは自由と民主主義の問題に立ち帰るべきだということだ。特に政治革命というか、政治的変革の領域においてはである。



自由と民主主義とは何かを認識し、それを運動として展開できる存在が主体である。問題が分かれば問題の半ばの解決だと言ったのはレーニンだが、問題が分かるとは現在において自由と民主主義とは何か分かることである。自由や民主主義は言葉としては過剰に流通しているが、内容としては曖昧でということが現在の問題なのだ。

安倍政治が何であり、その非民主主義とは何かはわかりやすそうでなかなかわからない。その意味で、僕らが国葬批判を通して安倍政治が何であったかを明瞭にすることは重要なことである。かなり明確なはずのプーチンの強権的、専制的、非民主的な政治ですら、それを明瞭には批判できない部分がある。それは自己の中で自由や民主主義に対する考えが曖昧であるためだ。つまり、プーチンや習近平の対応は自己の自由や民主主義をリトマス紙

にかけるようなところがある。それは安倍の国葬批判の中で考えてきたことだ。